

六十八年

「無責任」への分岐点

工藤進

フランスの冬は午後の四時を過ぎると暗くなる。

私の家から北に五六分歩いたところに、革命時代に壊され、正面がのつべらぼうのモンチエヌフ・聖ヨハネ教会という巨大な教会があった。前半分がないのにあの大きさであるから、破壊以前はおそらくこの町にある大小二十ぐらいある教会のなかで最大級のものだったに違いない。この古い町には様々な歴史のつめあとがある。町の中心には十二世紀の中頃、アリエノー・ダキテーヌがアンリ・プランタジユネ（すぐイギリス王となる）と結婚したノートルダム・大教会があるが、正面に彫られた聖者の頭部はすべて削りとられていた。宗教戦争時代のプロテスタントの仕業である。宗教も革命も破壊の道を通る。

この町にはジャンヌ・ダルクの神学審問委員会にさかのぼり、ラブレール、デカルト、カルヴァンも一時籍を置いたという古い

大学があり、その建物の中にはミッテランがバカロレアを受けたという小部屋もあった。その後八十年代になって再訪したときは、大学の古文書からなんとデカルトの修業証がでてきたと話題になっていた。古い大学の建物もそうだが、この町ではなんでもないような街角に二千年をこえる歴史が堆積されている。モンチエヌフの残った後陣は、この町の風景のなかで最も美しいもののひとつだが、半分破壊されたこの美しい教会の近くにシネ・ユと呼ばれる大学映画館があった。

六十七年の秋、ある日本人を迎えにパリに出た私は、同じモスクワからの飛行機で到着したNさんという、まだ二十歳前の少年に会った。東京の高校を出てパリの映画学校に入るために来たのだという。フランス語がまったくできず、カフェでの注文もトイレを尋ねる言葉も知らなかったが精悍な顔をしていた。

私が映画というものを知的実体として意識したのは、この無知で勇敢な少年を見てからである。人は一目で感化されることがある。

しかし想像力に乏しい私は暗室で映像を眺めるより、この町では外で実際の建物や人間を見るほうがずっと面白かったの、こつした映画館にそれほど通つたわけではない。むしろ町そのものが、自分自身そのなかである役を割りふられた巨大なシネマのように私には見え、わざわざ暗い部屋のなかで自分が排除されている虚構(そうでないことはあとで気づくのだが)を見に行こうとは思わなかったというのが正確かもしれない。さらにシネ・ユはべらぼうに安かったこともあってなんだかありがたみがなかった。よさそうな映画は心地よい椅子にすわり高い金を払ってみたいという見栄(だろっか?)が私にはある。

私の生まれ育つた秋田の鉾山町には、鉾山勤めの人達の娯楽用に造られた康楽館という名の大きな歌舞伎小屋(こざに座つて見る)があり、芝居のない日の土日は古い映画をやつていたのでよく通つたが、花園館という、椅子席(といつても背もたれ付のベンチ)のある、比較的新しい映画を週日にやる方にも、お金のやり繰りをつけて見にいった。フランスという国が私にとって特権的な位置を占めるようになったのは、小学校の頃、そこで「白い馬」という映画を見てからである。フランス・カマルグ地方の野性馬と少年の交流を描いたこの映画を、三十数年後にヴィデオで見た時も涙が止まらなかったが、私がフラン

スに見ようとし、そしていまも見つけている夢は、当時は不可解なフランス語のナレーションの響きに支えられたこの「白い馬」の映像の延長であることに今ふと気づく。

さて六十八年が明けても夜は短くはならず、また学生増、教師不足、予算不足による二年目での試験不合格者が増え、学生全体にあせりの様相が見えてきていたが五月革命はまだだった。そうしたある日、「ハラキリ」という、学生の苛立つた心に呼応するようなどぎつい題名の日本映画が、大学のアンフィと呼ばれる講堂のような教室で上映されるといふヒラ広告が町の方々に貼られた。私が日本の大学を出たころでできたこの映画は見たことはなかったが、太平の世が続き、切腹という制度の実体が失われてきたころ、切腹する刀もないのに武家屋敷の庭で切腹すると称して、その武家から迷惑金をせしめようとした若者が、差していた竹光で実際に切腹しなければならなくなるといふような話であることは知っていた。しかしシネ・ユにもあまり行かなかった私が、この教室の延長のような大学の講堂での日本映画の上映会になぜ行ったのか、いまではよく思い出せない。

「法の精神」のなかでモンテスキューはほんの少しだが、当時(江戸時代)の日本の法制度について述べている。日本は極端な罰則体系によって法のバランスが失われている、というのだ。この映画のテーマも、実社会から切り離されたこつした伝

聞知見によつて裁断されるのではないかと、いい加減うんざりしたはずである。しかしこの町で二年目の冬を迎えていた私には、日本についてふつうのフランス人が持つような一種のエキゾティスムが芽生えてきていたのかもしれない。大学講堂での映画会は、上演後ほとんど常にディスプレイがその場で行われるのだったが、それがうとましくもあり、反面、日本人が議論に加わらなかつたら見にきた人はがっかりするだろう、という思いもあつた。

フランスでは喋るべきときに喋らない者はバカだとみなされる。無言の意を汲むということは、よほどの親しい仲でも、皆無とは言わないが滅多にない。当時、日本語もろくに使えなかつた私がフランス語ではまがりなりにも自分を主張できるようになつたのは、こつした風土に否応無く投げ込まれたからである。その後帰国してから頭の中で事前に作文せずに日本語をどうやらしゃべれるようになったのも、こつした経験のおかげだ。

日本の「標準語」がほとんど外国語に等しいような地方出身の人が英語やフランス語と限らず、外国語で自分を表現できるようにになると、なぜかもう一つの外国語である日本語もコンプレックスなく使えるようになる。しかし日本人であるから当然「国語」である日本語を所有していると思ひ込んでいる人、大多数に共通の言語で自己を十分表現できる言語的体制派人間は、自己表現のためにも一つの言語を学ぶという動機は強くない。したがつて外国語の上達が遅く不十分であり、結局違う言語の

価値観をもつ人間の立場になつて考えてやることがあつくつになる。すべて日本語に翻訳し、日本「標準語」だけでものごとを表現したがる日本人は、どこでも英語の論理を通そうする一部のアメリカ人に似ている。

「ハラキリ」を見にいったのは、この機会に何か言うことを期待された「日本人」としての私が、フランスの学生に自分たちの閉塞感をこつした外国作品のテーマを批判することで誤魔化してはならないと言おうとしたからだ、といつたら事後の後悔と言われるだろう。実際は単に、バカとも、フランス語ができないからとも思われなかつたのだ。

映画は最初、ある初老の浪人が立派な武家屋敷に、庭で切腹させてくれと訪ねてくるところからはじまる。また金目当てに來たと思つた家老は、以前やはりこの家に切腹をさせてくれと頼みにきた若侍の話をして翻意をつながす。この若者は期待に反し、竹光による切腹を強制され、長い酷い苦しみのおと介錯されたのであつた。記号化されたような制度にも苛酷な実体がまだあるのだと。しかしこの初老の浪人は金目当てではなく、酷い死に方をした娘婿の復讐にやつてきたのだ。仲代達矢が浪人、家老が三國連太郎であつた。

貧しさから自分の刀はとうの昔に売り払つていたのだが、切腹のときに真剣を使えず、竹光を用いねばならない、ということとはあり得ないことではないかもしれないが、極めて異常な状況である。しかしフランスの学生は竹光切腹音楽は竹満徹だつ

た)という形態を当然の前提ととり、後半の復讐がカタルシスになったようだった。彼らはこうした切腹が当時の日本武士のふつうの習慣であるとしたのだ。各々の立場の者が、多くは死という形で面目をほどくすこの映画は、二度とみたくなくなるほど重苦しいものであった。

空洞化したかに見える切腹制度を利用しようとしても、それを逆手にとる体制から逃れることはできず、異議申し立てが不可能な状況でそれを被るしかないということであり、この非人間性を回復する唯一の方法は私法(仇討ち)の論理だけだということのように私には思えたが、これを彼らは現在まで続く日本の非西欧的な習慣のひとつなのだ、と片づけた。この映画は五月革命前のざらつく彼らを激しく反発させたのである。

映画の解釈はさまざまあっていい。しかしこうした理解の構造はモンテスキューの時代から本質的には変わっていない。当時の破綻のない論理と法の体制とがもつ非人間性を、私法であるがなう話はフランスとかぎらずどこにでもある。彼らはこれを前世紀の遺物と見なしたかったのだ。「ハラキリ」の責任のとりかた、とらせかたをフランスの田舎で見、議論を聴きながら、私は遠く離れた昔の秋田の実家での、とある事件を思い出していた。

父方の祖母は小さい私をかわいがってくれた。明治二十年代の生まれの彼女は江戸時代の間はこうしたものか、と思わせ

るような人であり、北東北はほとんど縄文時代が江戸時代まで続いたようなところであるから、縄文の人を見るような観があった。私の小学校時代、彼女は六十歳前後だったが、かくしゃくとしていて私はよくこの婆さんのあとにくっついて畑や田んぼ、山の草刈りにでかけた。彼女の知恵は学校を出た母の知恵とは異質のものがあり、お喋り好きな母の当時の教えは言葉として覚えていたが、祖母の教えは言葉ではなく内容として記憶している。母は言葉で教えたが、言葉少ない祖母の教えは姿勢と態度によるものだった。

アンダースタンドという英語はドイツ語のフェルシュテューエン、ギリシャ語のエピステメーという表現に似て、「師の姿勢を真似して」側に立つ」という具体的身体行為にさかのぼる。フランス語のコンブランドルはラテン語のコンプレヘンデレ(手でつかみとる)という、これも身体的行為に由来している。一方、日本では「分別する、分ける」という手の行為に関わる「分かる」があるのに、「理解」という身体的具体性を想像させない漢語を使いたがる。

祖母の実家には私より少し年上のひさし(向こうでは「ひさし」と「さ」を強く発音する)という名の祖母の甥がいて、彼女はそのひさしもとても可愛がっていた。とても穏やかで優しく、行きたびに祖母を大事にし、私とは遊んでくれた。

その「ひさし」が小学校の三年になったころ、自宅の庭の梅の木に首をつって死んだ。驚愕して悲しむ祖母からすぐには

はつきりとした事情はきけなかつたが、後でわかつたことはつぎのようなものである。

町の小学校は一つしかなかつたが、戦後まもなくの小学校の音楽室には壊れがかつたオルガンがあつたそうだ。私はまだ小学校前だったのでそのオルガンのことは知らないが、そのたつたひとつのオルガンのある日学童がよつてたかつて本当に壊してしまい、中の金属笛をめいめいがひとつづつ持ち去るという事件があつた。ひさしは笛を持ち帰つたのではなかつたそうだが、彼はそのオルガンを壊した学童の仲間だつたらしい。学校の担任による本格的調べが始まる直前に、彼は庭の低いが太い梅の木に縄をかけたのであつた。

まもなくこの梅の木は大伯父によつて切り倒された。祖母はもともと学校というものを信用していなかつたが、この事件のあととは私がいくら学校でいい成績をとつても、優等賞をもらつても反応は母とはまるで違つていた。祖母はだいたい幼稚園や学校などというものを好んでいるふうはなかつた。カトリック幼稚園に三日行つて喧嘩してからさばりはじめ、近くの山や田んぼで弁当をたべて帰つてきてみたら、たちまち幼稚園から家に連絡があり、親にはこつぴどく叱られ、無理して頼みこんで入れてもらった幼稚園をやめさせられたことがあるが、祖母はそんなことには頓着せず、私に対する態度は変えなかつた。

フランスのアンフィ映写場での議論を聴いて私は、「ひさしの死」の話をした。旧家の末裔の彼は、学校の先生による盗みの

取り調べなどという屈辱には耐えられなかつたのだ、というのは残つた者が言えることだろう。小学校三年になつたばかりといつたらまだ八歳だ。八歳で彼は何を、どう考えたのだろうか。彼はいとも自然に自死を選んだように見える。しかしこれが当時の日本の（遅れていると言われる）北東北のたてまえ、体制であつた。祖母も実家の者も外では平静を保つた。事件の調査はふつとんでしまつた。

「自死」と「体制の論理」とに關して、この映画と「ひさしの死」とは私にとつては共通している。日本では公法は私法に転覆させられ、それが新しい公法を生みだすきっかけとなるようにみえるのも共通している。大革命の破壊と殺戮をへたのちに共和国となつたフランスも、ついこの間まではそうだつたのではなかつたか。しかし「自死」にしろ「仇討ち」にしろ、公論理の非人間性に対する私論理の過度な反応を、フランスも日本も今や許容できないという点では同じではないのだから。私はこのようなことを言つたつもりだつたが一座は異様に静まり返り、皆なんだか白けた感で帰途についた。

六八年五月の学生の騒動は今「五月革命」と呼ばれることがあるが、向こうでの当時の私の友人は「五月非常事態（レ・ゼヴェヌマン・ド・メ）」と呼ぶ。この事態は偶発的なものではなく、直接的にはアルジェリア戦争から続く、国内での政治、社会、経済上の混乱が原因である。ド・ゴール大統領は

さまざまな方策を講じて事態の打開をはかろうとした。同年七月の地方選では「カオス状態」とか「共産主義化の脅威」といった言葉で辛うじて乗り切るが、翌年、上院改革と地方改革とが国会で否決されるとド・ゴールはさっさと大統領を辞任する。六十八年はしたがって、戦後の旧体制、最後の切り札として登場していたド・ゴールの最後の努力の年である。末期とはいえず、テレビで独特の抑揚でフランス語を話すド・ゴールの風貌には超人的なカリスマ性があり、政治信条が違っても尊敬の念を抱いていた。映像と肉声の力は偉大だ。現在のシラク大統領は彼の若い子分である。

この「五月非常事態」が勃発する前に、私は日本に、ほぼ二年ぶりに帰国した。

フランスに行く前の、オリンピックの余韻と余燼でまだ埃っぽかった東京は夜の明るさを増し、町の風情も人の顔も妙に派手っぽくなっていた。何だかまったく習慣の違った国に帰ったようで、道を歩くと人にぶつかりそうになり、バスにもうまく乗れず、後の人に迷惑をかけるので、あまり外に出ずに妹の家に三日ばかり文字通り蟄居したあと、秋田の家に帰って三週間ほど休養した。フランスの田舎からパリに出たときも目がくらむ感じはあったが、東京は二年たらずの間に驚くべき変容を遂げていた。

東京に戻ってしばらくぼうつとしていたが、東大安田講堂の

占拠とその攻防がはじまり、その占拠者の指導者の一人が、私の大学時代の友人で私より先に帰国していたMさんであるのを知った時はひととき果然とした。むかし、井の頭にある私の下宿を訪ねてきた時に、昼に冷し中華を出前でとったところ、「お前はブルジョワだ」といった男である。台所のない下宿なのでなにかを作った、などということではできなかっただけの話だ。一体、私のいない間の東京で何がどう変わったのか見当をつけるには時間がかかった。町の人の顔は、フランスの暗い、が真剣な感じとは逆に、どちらかと言えば幸福感に満ちていたように思う。プロコルハルム（フランスではプロッコラムと言っていたので日本でさがす出すのに苦労したが）の「青い影」とか、ピージーズの「ワールド」といったちよつとけだるい幸福感をかもしだす曲が吉祥寺の繁華街には流れていた。庄司薫の「赤ずきんちゃん」がカマトト高校生には人気だった。私が本格的に酒を飲みはじめたのはこの頃からだ。「ハラキリ」と「ひさしの死」から何世代も飛び越えていた。

しかしこの時代が妙に凶暴な時代であったとも思うのは、もしかしたら私自身若く凶暴だったからかも知れない。三億円強奪事件があった。私の大家さんである大学教授は、家宅捜索が簡単に許された戦前の警察なら、この事件はすぐ解決しただろうと言った。この頃から人々の顔から驚きの表情が消えてきたように思う。かけがえのない物や事態がどんどん少なくなっていく、記号化されることが可能な事態はすべて記号化されつつ

あつた。なんでもあり、どんなものでも替えがきく。以前通つた赤坂のプールは力(道山所有の)マンションのなかにあつた。ある冬、力道山はやくざに刺し殺されたが、プールもマンションもそのまま残っていた。ある秋には三島由紀夫が自死し、介添人に首をはねさせた。その時は湘南に遊びにいらつていて車のラジオでそのニュースを聴いたのだが、はじめ、三島を三波春夫)と勘違いするくらい私はボケてしまつていた。

六十八年を分岐点として東京とパリははつきりと違う方向に走りはじめていた。アメリカ(英語文化)が双方の町にどつと入り込んだが、パリには同質だが胡散臭いものに抵抗する歴史の「ため」がある。一方、東京はこうした歴史の「ため」が太平洋戦争で打ち砕かれてしまいなくなつてしまつていた。空襲で破壊されたのは日本の建物ばかりではないのだ。パリでは日本(文化)は翻訳では買えないとわかっているから、でかい日本文化センターとか、素晴らしいイスラム文化センターをパリの超一流の場所にたてた。

東京では「切腹」(六十二年松竹)のようなものを真剣に見る者、議論する者が激減していた。田舎では「ひさしの死」は遠い思い出となつていた。三億円事件の経過はこうした世の中の変化を微妙に象徴していたのではないかと今では思う。この明らかな犯罪は被害者というものがはつきりとイメージできなかつた。おそらくなんらかの保険機構が強奪された金額を補填

したのである(違つかもしれないが私などはそう思つてた)。手がかりとなるものを沢山残して犯人は明らかに存在したようだが奇妙なことに捕まらなかつた。法は明らかに犯されていたが、被害者は顔のない法人であり、犯したものは責任を問われることなく闇に消えた。数年して捜査を黙々と続けてきた刑事が過労で死んだことが新聞の片隅に載つた。そしてまもなく事件は時効となつた。もはやここでは公の法を犯したものに責任を取らせることが不可能ということであつたが、人々はその事態に形だけの憤りを覚えても私的な怒りを持つことは少なかつた。人々はこの事件から無意識の教訓を得てしまつたように思える。つまり公的倫理もその発現たる公教育もなめられ始めたのだ。

祖母は公とか法とはしょせん人の作り物であることをはじめから知つていたようだが、そうではないと思つてきた者の処世のキーワードは、以後「無責任」という語になつた。

知識人と呼ばれてきた人種の多くはこの頃から、なだれをうつつ方向転換した。